説教以外のコミュニケーション
——ルカの福音書第10章1–11節から——

福田充男

はじめに

本稿の目的は、ルカの福音書第10章の七十弟子派遣の記事に登場する二人組の弟子たちと宣教地の人々との間のコミュニケーションを分析することにより、日本の地方教会でなされている説教、つまり「学校型モノローグ」とは対極をなす「宣教現場における双方向的コミュニケーション」を、日本の教会に導入するための道を模索することである。

Ⅰ．七十弟子派遣エピソードの背景

福音書には、イエスご自身が取り組まれた弟子たちの組織的な派遣の記事が二種類記録されている。一つは、イエスによる「十二弟子の派遣」で、もう一つは、イエスと十二弟子による「七十弟子（あるいは七十二弟子）の派遣」である。

ルカの福音書第10章に記されている七十弟子の派遣の記事は、十二弟子もまたイエスと一緒に派遣する側に立ったという意味で、派遣の連鎖のプロセスを伺う重要な資料である。十二弟子は、七十弟子と同行しないことで派遣する側の立場を経験した。つまり、ここで示唆されているのは、十二弟子と同じように、七十弟子もまたやがて派遣する側に立ち、自分たちが育てた弟子たちを派遣するという循環が起こったという点だ。そして、その後も、派遣する度に

約 6 倍（70÷12≒6）の人数を送り出すということが一つの型になったと考えられることだ[1]。弟子派遣の二種類の記事は、大宣教命令の実行が、弟子育成者の連続的な派遣に伴う、弟子の幾何級数的な増加によってもたらされたことを主張しているように思われる。

ルカの福音書第 10 章の派遣が非常に成功したということは、直後に記されている弟子たちの喜びの報告によって明らかである（ルカ 10：17 参照）。ミッションの成功は、緻密な計画が実行された結果というわけではない。戦略は、漁師たちが実行できるシンプルな指示によって構成されていた。「無学なただの人たち」（使徒 4：13）と見られた人たちは、分厚いマニュアルを読むことはできなかっただろう。記されている項目は、「覚え書き」とか、「きっかけ」とかと表現した方がよいほど簡素なものだった。実際、真に有効な戦略はシンプルなのだ。

戦略がシンプルだった理由は、少なくも三つあると思われる。第 1 に、賜物が豊かで優れた能力を持つ一握りの人たちだけでなく、誰でも実行できるようになるためだった。このシンプルさが増殖の鍵だ。第 2 に、詳細なマニュアルがなくても為すべきことがすでに身に付いていたからだ。派遣された者たちは、派遣前に、イエスご自身や兄弟子たちと生活を共にしてきたので、模範を見たり、練習をしたり、委任されたりした経験が豊かにあった。第 3 に、彼らは聖霊の導きを受けていたので、その場その場で父に聞きながら、時に応じて行動することができたからだ（マタイ 10：20 参照）。

弟子たちが派遣された町は皆ユダヤの町だったし、弟子たちは全員ユダヤ人だったので、イエスが行くようにと命じられた目的の町に着いた日とその翌日は、宿泊を手配する必要はなかった。なぜなら、自分たちの町に来た旅人がユダヤ人だということを町のリーダーたちが判別した時点で、彼らは町のゲストとして有力者の家に斡旋されたからだ。旅人たちは、2 日の間、無料で宿泊したり飲み食いしたりすることができた。イエスは、すでにあったユダヤ人の相互扶助システムを用いて宣教を進められたのだ。

[1] David S. Lim, "Towards a Radical Contextualization Paradigm in Evangelizing Buddhists." in *Sharing Jesus in the Buddhist World*.. (eds. David Lim and Steve Spaulding, Pasadena, CA： William Carey Library, 2003), 75－76 参照

その伝統は、次の時代の使徒たちにも受け継がれた。パウロは新しい町に行くと、ユダヤ人の会堂で話した。マタイはエチオピアまで、アンデレはロシアまで、トマスはインドまで行ったと言われているが、彼らは、点在するユダヤ人のコミュニティを辿っていったのだと思われる。会堂は魂の刈り取り場であり、平安の子たちとの出会いの場所だった[2]。そういうわけで、ルカの福音書第 10 章で派遣された 2 人組の弟子たちは、どこに行っても、財布も袋も持たずに旅行できたのである。

しかし、滞在三日目以降にも続けてその家に宿泊するためには、何らかの料金を支払うか、家業を手伝う必要があった。二人の弟子たちはお金を持っていくことを禁じられていたので、宿賃を支払うというオプションはなかった。彼らは、三日目以降、平安の子の家業を手伝ったと思われる。海辺や湖の町なら、漁に一緒に出ただろうし、農村なら農耕を、放牧地なら放牧をというように、何であれ、世話になった家族の仕事を手伝うことで、引き続きその家に留まったのである。

弟子たちのコミュニケーションは、食卓と仕事場、つまり日常生活の中でなされた。イエスが所有物の携帯を禁止されたのは、彼らが仕事場で福音を伝えるためだったと考えられる。もし、イエスが福音宣教のために学校システムが有効だと思われたなら、今でも「イエス大学」みたいなものが残っていただろう。イエスのコミュニケーションは、徹頭徹尾、教室での講義ではなく、生活に直に関与することによってなされた。

Ⅱ．弟子たちのコミュニケーション

それでは以下に、ルカの福音書第 10 章の七十弟子派遣の記事から、派遣さ

[2] ユダヤ人の会堂や神殿で弟子たちがキリスト教会の礼拝をしたと考え、それをセレブレーションと呼び、各家での礼拝をセルと呼んで、二つの礼拝の形があったと主張する向きがあるが、それは弟子たちの伝道の力を過小評価した上での時代錯誤である。弟子たちは、ユダヤの町や村に二人組で派遣されたように、エルサレムではメシアを待ち望むユダヤ人がいた神殿に、異邦人の地域ではディアスポラや神を畏れる異邦人が集まっていたユダヤ人の会堂に、二人組で戦略的に派遣されてメシアの到来を証ししたのだ。

れた弟子たちが、派遣先で出会った平安の子とその家族に対して、どのようなコミュニケーションをしたかを概観する。

1）収穫のために働き手を育てる実地訓練

パウロはテモテに対して、「他の人にも教える力のある忠実な人たち」（Ⅱテモテ2：2）を教えるようにと命じた。弟子育成のバトンが次々に手渡されていく様子を、家系になぞらえると、パウロが第一世代なら、テモテが第二世代、「忠実な人たち」が第三世代、そして、「他の人」が第四世代ということになる。第一世代のパウロは、第二世代のテモテに、単に弟子を育てよと命じたのではなく、弟子育成者を育てるようにと命じた。弟子育成のバトンが四世代先まで手渡されるようにすることが、幾何級数的に弟子が増殖するムーブメントの土台を据えるための必要条件なのである。

この増殖のDNAの創始者は、神ご自身だ。すべての地上の生物は、人間を含めて「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」（創世記 1：28）という命令を受けている。これはもとより、最初の人間が何十億人もの子どもを産むようになる、という命令ではない。子が孫を、孫がひ孫をというように、世代が下って行くことが想定されている。神がアブラハムを外に連れ出して「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」と語りかけ、さらに、「あなたの子孫はこのようになる。」（創世記15：5）と約束されたとき、アブラハムから数えて四世代目となるヤコブの子孫であるイスラエル民族、さらには、アブラハムの信仰を継承するイエスの弟子たちの群れを見通しておられたのだ。

そういう意味で、七十弟子は十二弟子によって育てられたと考えるのが自然だ。イエスが十二弟子を育て、十二弟子が七十弟子を育てたとするなら、イエスから数えて三世代目の弟子が七十弟子だったということになる。三世代目の七十弟子は、二世代目の十二弟子から弟子育成者として育てられた者たちであり、収穫の畑に出かけていって第四世代の弟子を育てるというミッションを与えられていた。だから、七十弟子に委ねられた主要な働きは、収穫を刈り取ることではなく、収穫の畑の中で「収穫を刈り取る働き人」を育てることだったのである。

イエスは、「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」（ルカ 10：2）と命じられた。この命令は、「働き人をリクルートしてから出かけなさい。」という意味ではなく、「出かけたところで働き人と出会うように祈れ。」という意味だった。収穫の畑に出かける人たちは、すでに任命され、二人一組に分けられていた。一つの町の救いのために、三人目の働き人が起こされるのを待つ必要はなかったのだ。何よりも大切なことは、二人組の弟子が派遣された町で出会う平安の子たちが、弟子育成者を育てる育成者となること、つまり、霊的な孫を見ることができるように育てることだったのである。このような弟子育成の連鎖が、結果的に広範囲に及ぶ収穫の刈り取りとなった。

一つの派遣事業で何人の回心者が起こされるのか、ということは、あまり大きな問題ではない。収穫は多いと言われているので、それは多数に決まっている。問題は、将来「霊的なひ孫」を与えられる人が派遣されるかどうか、という点である。七十弟子は、「狼の群れの中に子羊を送り出すようなもの」（3節）と言われても、「財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。」（4節）と言われても、安全で便利な場所を離れて、宣教地に出かけていくほど宣教のために動機付けられた人たちだった。彼らが見ていたものは、自分たちの働きを通して、イエスの家系に加えられていく霊的な子孫たちの群れだったのだと思う。

霊的なひ孫が育てられるために必要なことは少なくとも三つある。1）弟子の一人ひとりが神に直接つながる。もちろん、リーダーが模範を示す必要があるが、霊的な親に依存させてはならない。エリが少年サムエルに、「『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」（Ⅰサムエル3：9）と勧めたように、リーダーは弟子たちを神との直接的な対話へと導く必要がある。2）「みことばを聞いてそれを悟る」（マタイ 13：23）。つまり「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられ」（Ⅰテモテ 2：4）る神の心を受け取ることだ。家族や町や国や諸国が救われるために、世から召し出されたことを理解して実行することだ。3）一緒に派遣された2人が一致して働けるように愛しあう。「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるので

す。」（ヨハネ 13：35）

弟子たちのコミュニケーションの特徴は、イエスの生き方を模倣することだった。つまり、まず、自ら模範を示し、次に、手許で弟子たちが自分たちでできるように助け、その上で、霊的な孫を見ることができる者として派遣する。神との直接的な対話も、世界宣教のための働きも、互いに愛しあうことも、単に教えるだけでは身に付かない。模範、育成、派遣と続く実地訓練のプロセスの中で内在化され、世代を越えて増え広がったのである。

2）平安を祈る

町のリーダーたちが斡旋してくれた家に入るときに、彼らがまずしたことは、平安を祈ることだった。弟子たちは、「どんな家にはいっても、まず、『この家に平安があるように。』と言いなさい。もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしいないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。」（ルカ 10：6）と命じられた。

ルカの福音書第 10 章の派遣は、自分のオイコス（家族や職場や地元の人脈）の外の領域への派遣なので、宣教者たちは、馴染みのない習慣を持つ宣教地の人たちと接することで文化ギャップを経験したに違いない。文化的背景を異にする人々に出会ったときに、自分の文化では当たり前だったことが、外国に行くと適切ではないということを改めて認識する。そのときに、自分の経験を絶対化して異文化を裁いてしまっては、相手を理解することはできない。現代のように旅行が一般的ではなかった時代では特に、見知らぬ町に滞在するためには、最初にこのカルチャーショックを乗り越えなければならなかった。

そこで、イエスは弟子たちに、まず挨拶をするように命じられたのだ。福音を待っている人たちは、福音を伝える人たちよりも劣っているわけではない。無自覚のままだと持ってしまいがちな違和感や警戒感や敵対意識を捨てて、相手のありのままを受け入れて祝福するところからコミュニケーションを始めるべきだ。「平安があるように。」という祈りは、条件なしに神があなたを愛しているというメッセージを相手に伝える。平安とは、人が神から受け得る祝福の

総体を表わしている[3]。2 人の弟子たちは、自分たちを受け入れてくれた家長とその家に、神から来るあらゆる祝福が注がれるように、という思いで訪問した。

また、ここでは、祝福する気持ちが相手に伝わるという以上のことが起こった。つまり、「平安があるように」と宣言し、その人が平安を受けるべき人であるなら、実際に平安がその人の上にとどまったのだ。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」（創世記 1：3）という創造のときの権威の発動が宣教地で起こった。イザヤ書で、「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」（イザヤ 55：10〜11）と説明されている「言葉の現実化」である。

弟子たちは、神の国の王であるイエスから権威を委任されたものとして、宣教地の人々に対して、いわば神を代表し、神の働きを代行したのだ。弟子たちは、イエスが命じられた通りに行動することで、「暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移」（コロサイ 1：13）されていく人々を見ることができた。その働きはまた、宣教者がただ恵みによってのみ受けることができる、栄光ある「義とする務め」（Ⅱコリント 3：9）だった。平安を祈ることは、「いのちから出ていのちに至らせるかおり」（Ⅱコリント 2：16）として機能することだった。

家長が平安の子かどうかは、弟子たちが祈った平安を受け取るかどうかで見分けることができた。コミュニケーションが展開するかどうかは、この最初の遭遇で決まった。その時点で、狭義の伝道、つまり、「平安を受け取って神の国の王に従って生きるように導く働き」は、一旦（あるいは、場合によっては永遠に）終了したということだ。家長が平安を受け取った場合は、「家から家へと渡り歩」（ルカ 10：7）かず、平安の子の家にとどまり、弟子たちのライフスタイルを見せることを通して、神の国を受け入れた人々を育成するために時間が

[3] Walter Brueggemann, *Living Toward A Vision： Biblical Reflections On Shalom.* (Philadelphia, PA： United Church Press, 1976), 39 参照

使われた。

家長が平安を受け取らない場合は、祈った弟子のところに平安が戻ってくる。その場合は、その町のために神が用意された平安が届けられないことになる。彼らはその町の福音化を断念して、次の町に行くようになる。粘って町に留まって福音を伝えることは禁じられた。かえって、町の広場に出て、「私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。」（ルカ 10：11）と宣言するようにと命じられた。神の時に、神と神が遣わされた人々を受け入れる用意ができているかどうかで、ソドムより重い罰を受けるようになるかどうかが決まる。そういう意味では、弟子たちの派遣は、刈り取りの旅であって、種まきの旅ではなかった（ヨハネ 4：35 参照）。弟子たちは種を携えて畑に行ったのではなく鎌を持って畑に入った。「実りは多い」（ルカ 10：2）のだ。

3）出されるものを食べる

家長が平安を受け取ったら、次にすることは、受洗準備コースに招くことではなく、一緒に食事をすることだった。「その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。どの町にはいっても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。」（ルカ 10：7～8）この派遣の記事の中で、「出されたものを食べよ」という指示だけが 2 回語られている。「食事なくして働きなし」だ。食べることは、相手の文化を受け入れることだ。もし、納豆やらっきょうを好んで食べる宣教師がいるなら、日本人はその人の言うことを信頼しやすいだろう。地元の食物を食することは、宣教地の人々を受け入れることなのだ。

イエスのスタイルは、教室と食事を組み合わせることではなかった。食事自体がミニストリーだった。ザアカイの回心のエピソードは、そのことを如実に表わしている。「イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。』ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、『あの方は罪人のところに行って客となられた。』と

言ってつぶやいた。ところがザアカイは立って、主に言った。『主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。』イエスは、彼に言われた。『きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。』」（ルカ 19：5－9）客となること、つまり食事と宿泊のもてなしを受けること自体が、批判する人たちへのメッセージとなり、また、ザアカイの家に救いをもたらすことにつながった。

イエスは「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません。」（ルカ 9：58）とおっしゃった。彼は自分の家を持っていらっしゃらなかったので、ホームパーティーを開くことはできなかった。ほとんどの活動は、人の家の食卓でなされた。エマオの途上でイエスにお会いした二人の弟子たちにとって、イエスとの食事は、特別な思い出だったに違いない。目が開かれてイエスを認識するきっかけになったのは、イエスがパンを割く仕草だった（ルカ 24：30－31）。初代の弟子たちも、食事のために集まった（Ⅰコリント 11：33）。食卓を囲むところに、礼拝、伝道、奉仕、交わり、教育のすべてがあった。彼らは食べながら、救いの物語を辿り、主の死を告げ知らせ、貧しい人々に食事を分け与え、一つのからだであることを味わい、子どもたちに主のおきてを教えた。

食事の本当のご馳走は会話だ。一人の雄弁な人がすべての会話を支配してしまうような交わりはつまらないし、彼の教えがたとえ卓越していても、人々の記憶には留まらない。自分が話したことは留まるが、聞いているだけだと忘れてしまう。すべての人が会話に参加し、すべての人が他の人の話に耳を傾ける。あるときは教え、あるときは学び、あるときは戒め、あるときは悔い改める。すべての参加者が、他の人の戦い、葛藤、勝利、敗北を知っている。「あなたの戦いは私の戦いでもあり、あなたの勝利は私の勝利でもある」という関係が、そこで成立している。このように、生き様が自然に表現される率直な関係を通して、キリストに従う模範が、生きた証とともに浮き彫りになる。また、双方向的な会話を通して、人々はキリストご自身との直接的な対話の中に導かれていくのである。

平安の子の特徴を、覚えやすいように、「ひ・か・り」という三文字で表わ

している。三つのキーワードの最初の文字を並べた。まず、「ひ」は「開らいている」だ。彼の心は神に対して開いていた。弟子たちを歓迎し、弟子たちが祈った平安を受け取った。次に、「か」は、「渇いている」だ。真理に対して渇いていた。弟子たちがその町に到着したときに神の働きが始まったのではない。ずっと前から彼の心に神が渇きを与えることで準備をされていた。彼は、弟子たちと会って一所懸命学んだことだろう。最後に、「り」は、「リーダー」だ。彼は、町の中で影響力のあるリーダーだった。彼が平安を受け取るかどうかに、町の命運がかかっていた。

このような特徴を持つ平安の子と弟子たちは、食事中何を話したのだろう。かつてバプテスマのヨハネからの使者が来たとき、イエスは、使者に対して次のように答えられた。「あなたがたは行って、自分たちの見たり聞いたりしたことをヨハネに報告しなさい。盲人が見えるようになり、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生き返り、貧しい者に福音が宣べ伝えられています。」（ルカ 9：27）平安の子との食事のときも、弟子たちは、自分が見聞きしたことを話したに違いない。それは、イエスがなされた力ある働きだった。イエスご自身を証しすることが、礼拝であり宣教であり交わりなのだ。

平安の子はイエスに心を開いただけでなく、すべてを捨ててイエスに従い、リスクを取って自分たちの町に来てくれた弟子たちの生き方にも関心を持ち、あこがれや好意を抱いたことだろう（使徒 2：47 参照）。そして、神に対する従順と派遣されていく働き、また、互いに愛しあう姿をお手本にしようとしたに違いない。弟子たちの姿は、神の国のあり方を見せるものだった。平安の子は、弟子たちが指し示したイエスと、イエスによって遣わされた弟子たちの交わりの両方を見たのだ。

4）病人を直す

弟子たちは悪霊の追い出しといやしを行なうための権能を与えられてから派遣された。「イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とをお授けになった。それから、神の国を宣べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた。」（ルカ 9：1−2）と記されている通りだ。弟子たちが出て行くときに、神ご自身が、彼らの語る言葉が真実だということを、「みことばに伴うしるしをもって、」（マルコ 16：20）お示しになった。だから、食事をしながら弟子たちが分かちあったイエスの力あるわざのエピソードは、遠いところで起こった夢物語として語られたのではなく、食事中に、あるいは、食事の後で、平安の子の目の前で、弟子たちによって実証されたのである。

イエスの指示は、「その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた。』と言いなさい。」（ルカ 10：9）だった。単に病人のために祈れと命じられたのではなく、直せと命じられた。そして、実際に直った。それは、宣教地から帰ってきた七十人が、「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」（ルカ 10：17）と、喜んで報告したことからわかる。弟子たちにとっては、いくつかの例外はあったものの、病人を直すことは当たり前の行為だった。病気のいやしや悪霊からの解放が伴わない神の国の宣教は、少なくともこの時代には考えられないことだったのだ。

平安の子は、自分や自分の家族がいやされることを通して、神の国の王が弟子たちと共にいて、全権大使である弟子たちを通して、権威と力を振るっておられることを知った。教会は、イエスを「生ける神の御子キリスト」（マタイ 16：16）と告白する信仰に立って、「ハデスの門」（マタイ 16：18）を打ち破るものだ。神の国の軍隊が進み、「狼」（ルカ 10：3）の支配が打ち破られた証拠の一つが、悪霊からの解放であり病のいやしなのである。

もちろん、現実には、すべての病がいやされるわけではないし、ましてや、病人が神の国の外に置かれているというわけでもない。病を経験することを通して人が成熟していくという例や、病の中で神の栄光が表わされるという例があることも承知している。しかし、パウロが、「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。」（Ｉコリント 9：1−2）と述べているように、「直せ」と命じられた方が、御霊と御力の現われによって直すことができるようにされたということが、彼らの経験だったのだ。

いやしは、平安の子に、説明を超えたリアリティを与えた。たとえば、食べたことのない料理について、いくら言葉で説明してもらってもわからないが、

一度試食するなら、もはやその味について説明してもらう必要はない。あとは、それを購入するかどうかを決めるだけだ。イエスは、「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。」（ヨハネ 6：51）とおっしゃった。イエスが「私を理解しなさい」とおっしゃらずに、「私を食べなさい」とおっしゃったのは、彼の働きが、説明よりも実証に力点があったことを意味する。

それで、イエスは多くの力あるわざをなさった。「わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。」（ヨハネ 14：11）とおっしゃったのは、そのためだ。漁師だったヨハネは、イエスのことを、「私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手でさわったもの」（Ⅰヨハネ 1：1）と表現したが、そこには説明を越えたリアリティがあった。まるで、まず試食してみなさい、それからお金を出して買うかを決めなさい、と言われているようだ。弟子たちを通してなされたいやしの働きは、神の国の本格的な到来の前味だったのだ。

5）「神の国が、あなたがたに近づいた」と言う

弟子派遣の目的は、神の国の接近を知らしめることだった。弟子たちが派遣されて町を訪問し、平安を祈り、食事を共にし、病人をいやしたのは、「神の国が近づいた」（ルカ 10：10）、という宣言を、その町が受け止めるようになるためだった。宣言の直前になされた悪霊からの解放や病気のいやしは、人々に対する神のあわれみの表現なのだが、それ自体が神の国のしるしでもあった。それは、悪霊が不法占拠していた領域に、神の国（支配）が確立されつつあることを立証し、「公平とあわれみと誠実」（マタイ 23：23 参照）という規範に基づいて全被造物が裁かれる日、つまり神の国の究極的な出現の日が近づいていることを警告するためのしるしだった。（エペソ 1：11 参照）。

元を正せば、悪霊の不法占拠は、神の委任を受けて世界を支配するようにと命じられた人間の反抗から始まった。福音を聞いた人が、まず悔い改め、罪の赦しを受けて、再び創造時の秩序に服することが、被造物全体が「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられ」（ローマ 8：21）るための不可欠のステップである。弟子たちがその町に派遣されたその日が、

それまで見過ごされていた無知の時代が終わり（使徒 17：30 参照）、「罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返」（使徒 3：19）るときだったのだ。

悔い改めて神に立ち返るという意味は、神の国の王であられるイエスに従って生きるライフスタイルを受け入れることだ。自分の言い分や計画や望みを優先しようとしないで、日々語られる王の言葉を守ることだ。心優しくへりくだっておられるイエスのくびきを負って、イエスから学びながら生活することだ（マタイ 11：29）。聞き従うなら、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記 1：28）という最初の命令を遂行することができる。そのような本来の生き方に戻っていくときに、「義と平和と聖霊による喜び」（ローマ 14：17）を経験することができる。そして、神の国のライフスタイルを受け入れる人が増え広がり、「百倍の実を結」（ルカ 8：8）ぶようになる。

しかし、神の国を受け入れて、それを味わうようになるためには、「応募期間」が終わるまでの間に申請する必要がある。締め切り日は、イエスの再臨の時だ。そのときには、神の国が力を持って到来し、あらゆる被造物が裁かれ、王が完全な支配を表わされる。だから、「神の国が近づいた」ということには、二重の意味がある。すでに神の国は、王の命令に従う弟子たちや平安の子のただ中にある（ルカ 17：21 参照）し、イエスが神の指によって悪霊を追い出している以上、神の国は地上に来ているのだ（ルカ 11：20 参照）。しかし、「その日」（ルカ 10：12）は、いまだ来ていない。それはやがて来る。そのときには、町が裁かれ、罰がくだされる。そして、その罰はソドムよりも重くなるのだ。

弟子たち、ひいては、弟子たちを派遣されたイエスを受け入れない町に対しては、大通りに出て行って、次のように宣言するようにと指示されている。「私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。」（ルカ 10：11）足についたちりまでぬぐい捨てるというのは、その町の将来がどうなっても自分たちとはまったく関係がないということを公言するという意味だ。イエスを受け入れる者と受け入れない者との間には、天と地ほどの差異がある。行き先の違うバスに乗ったようなものだ。このようなきっぱりとした宣言が人々の心に留まり、後

になって反省するようになるかもしれない。もちろん、必ず反省するという保証はないが、すぐに、その町に火山灰が降ってくるわけではないのだから、まだ裁きは猶予されているのである。

あまり渇いていない者や、聞く耳のない者に、いつまでも説明したり議論をしたりすることで、福音が足で踏みにじられたり、無意味な反抗にあったりする場合がある。イエスは、「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。」（マタイ 7：6）と警告された。それらの人々にかかわることで、今渇いている人たちや聞く耳のある人たちが待たされてしまう。求めが弱いことがわかった時点で、宣言して去るなら、後で渇いたり、聞く耳を持ったりするかもしれない。一回の派遣事業の可否は、平安の子に出会った直後に、弟子たちが祈った平安が、家長の上にとどまったかを見分けて行動することができるかどうかにかかっている。

弟子たちが宣言したとき、その内容だけでなく、宣言者の内なる確信が、人々にインパクトを与えた。神から教えられないでは、誰が将来起こることを確信に満ちて告げることができるだろう。この点が、律法学者の教えとイエスの教えとの違いだった。聞いた人々は、内容は理解できなかったこともあっただろうが、イエスが「権威ある者のように教えられた」（マタイ 7：29）ことはわかった。無学な普通の人と見られたペテロとヨハネの「話した内容」ではなく、彼らの「大胆さ」（使徒 4：13）を見て、裁判所に集まった人たちは驚いたのだ。パウロは、ユダヤ人がつまずいても、ギリシャ人が愚弄しても、「十字架につけられたキリストを宣べ伝える」（1 コリント 1：23）と言った。配慮しすぎて遠回しに説明するよりも、シンプルでも大胆な宣言をすることの方が求められる場面もあるのだ。

Ⅲ．日本の教会への適用

前章では、ルカの福音書第 10 章の七十弟子派遣のエピソードから、派遣された町に対して、弟子たちがどのようにコミュニケーションを図ったかを概観した。その内容は、第 1 に、模範、育成、派遣と続く実地訓練の文脈でなされたこと、第 2 に、平安を祈ったこと、第 3 に、一緒に食事をしたこと、第 4 に、

病人を直したこと、第 5 に、神の国について宣言したことだった。本章では、それらの要素を、日本宣教の現場にどのように適用できるかを検討する。

1）実地訓練の導入

病院で、新人看護師に注射を打たれて痛い思いをしたことがないだろうか。そういう場合はたいてい、あせる新人看護師を見守るベテラン看護師や看護教員が後ろで控えている。いくら教室でやり方を習っても、注射技術を習熟させることはできない。場数を踏むしかないのだそうだ。新人看護師が失敗することがわかっていても、現場で実地訓練をするしか上達の道はない。もし、そこで先輩が無闇に介入して、後輩の練習の機会を奪うなら、病院は機能しなくなる。注射を打てる看護師の前に列ができるというような事態になりかねない。

さて、日本の教会は機能しているだろうか。主任牧師以外の人が神の導きを受け取るなら、統制が取れなくなって混乱すると考えるなら、ほとんどの人々は受動的な指示待ち族になってしまう。また、たとえ、万人祭司の原則に同意し、すべての信者が神に聞きながら隣人を愛することが大切だと教えても、もし実地訓練がないなら、その教えを生活に適用する人たちを見ることはほとんどできない。いくら上手に説明しても、また、聴衆を感動させることができたとしても、それが聴衆の生き方に直結することは稀だ。

聞いたことは 10 パーセントしか記憶に残らない。見たことは 15 パーセント。見て聞いたことは、20 パーセント。話し合ったことは、40 パーセント。体験したことは 80 パーセント。もし、人に教えるならば、90 パーセント記憶に留まる。[4]イエスが実地訓練を重視なさった理由がそこにある。

ということは、説教だけだと 10 パーセント、視覚教材を使うと 20 パーセント。互いに話し合うならば 40 パーセント記憶に残るという計算になる。イエスはよく弟子たちに質問された。彼は質問の達人だった。また、「一対他」のモノローグではなく、グループで自由に発言することができるようにされた。誰でもイエスに直接質問することができた。イエスは、グループダイナミクスを上

[4] 吉田新一郎）『効果 10 倍の“教える”技術―授業から企業研修まで』（PHP 新書、2006 年）127－129 頁参照

手に用いられた。イエスの弟子グループには、誰かが一方的に話すのではなく、「互いに教え、互いに戒め」（コロサイ3：6）るという文化が根付いていた。

また、イエスは、まず模範を示した上で、ご自分が見ている所で被育成者に練習させられた。洗礼にしても、悪霊追い出しにしても、いやしにしても、問題が起こったときには助けることができる状況の中で、現場で実践する機会を弟子たちに与えられた。ベテランの看護師が新人看護師を見守るのと原則は同じだ。そして、一人前にできるようになったら、二人だけで派遣された。弟子たち自身が自立的に命令を実行する経験と、他者に教える経験をさせられたのである。そのことを通して、ご自身が天に挙げられた後にも、弟子たちが神の国の働きを継続できるようになさったのである。

日本の教会が、実地訓練の要素を導入するために、5つの提言をする。1）礼拝に双方向のコミュニケーションを取り入れる。話し合うならば、一方的に教えるよりも、四倍記憶に留まるようになる。2）リーダーが、神に聞き従って隣人を愛するという生き方を人々に見せる。被育成者を家庭に招いたり、一緒に宣教旅行に行くことなどが考えられる。3）被育成者を自分の手足のように使わないで、失敗をしてもよい環境の中で、自分で神に尋ね、自分の頭で考えることができるように助ける。時には、リーダーに対して「別の角度から取り組んでもいいですか。」などと言えるようでなければ、自立に向かって成長しているとは言えない。4）被育成者を大胆に派遣する。冒険が人を育てる。5）自分がいなくても働きが進むようになるためにはどうすればよいか、と常に考える。あるいは、自分が現場を去る日を決めて、段階的に具体的に、自分が去った後の働きの進展について準備する。

2）未信者のために祝福を祈る

日本では、「皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。」などという祈りの言葉を、手紙の文面や挨拶の結びに入れることが一般的だ。これは、相手の祝福を祈るというコンセプトが文化に内包されていることを示している。実際には、日常生活の中で、誰かのために個人的に祈るなどということはほとんど行なわれないのだが、この文化的要素を神の国の視点で活かすことができる。ある程度相手に信用された段階で、「あなたのために何かお祈りしてもいいです

か」と聞くと、筆者の経験では、十中八九祈らせてもらえる。そして、ほとんどの場合、祈られた相手は喜びに満たされる。おそらく、個人的に祈ってもらうというようなことは、生まれて初めての経験なのだと思う。そのとき、実際に神の平安が相手に留まるのを見る思いがする。

たとえ祈る機会が与えられなかったとしても、相手の優れたところ、また頑張っているところを心に留めて、それを言い表すことで、祝福が相手に伝わっていく。パウロは、「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。」（ピリピ4：8）と勧めた。実際、未信者の日本人から教えられることはたくさんある。まだ神を知らない未信者の弱点を並べ立てても、何も生産的なことは起こらない。むしろ、「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」（ピリピ2：3）という命令に従うことで、こちらが祝福したいという思いでかかわっていることが伝わるのだ。

信者、未信者にかかわらず、夫婦関係や嫁姑の関係で葛藤を覚えている人は多い。関係回復のためにまず最初にすることは、相手の祝福を祈ることだ。アダムがエバを始めて見たときに、「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。」（創世記2：23）と言って一体感を表明したが、罪を犯した後は、「あなたが私のそばに置かれたこの女」（創世記3：12）が自分に罪を犯させる原因となった、と言ってエバを神に告発した。エバばかりか神をも間接的に非難したのだ。相手の悪口を言うことは、その人を自分のそばに置かれた神に文句を言うことに他ならない。

そういう人たちに対しては、食事の度毎に、たとえば、「神様、このようにやさしい夫を私に与えてくださって感謝します。わたしのそばにこの夫を置いてくださった神様を賛美します。」と祈るように勧めている。こじれてしまった感情を脇に置いて、信仰によって「ふたりは一体」（創世記2：24）という霊的な現実を認め、神を賛美し始めるときに、まず祈る人の気持ちが変わる。そして、多くの場合、祈る人にもたらされた態度の変化を見た相手が、神に扱われるのだ。

未信者のために平安を祈るときに、少なくとも四つのことが起こる。第1に、

神が相手を祝福しようとしておられる思いを受け取り直すことができる。第 2 に、相手が平安を受け取るにふさわしければ、平安を受け取る。第 3 に、神が相手に語っておられる内容がわかる。第 4 に、相手にどのように、どの程度かかわるべきなのかを見分けることができる。第 3 の項目については、「3－5」の項で、後述する。

第 4 の見分けについては、本項で説明する。ルカの福音書第 8 章 5～15 節に、種まきのたとえがある。中東の種まきは大雑把で、種がどこに落ちるかは風任せで予想がつかない。福音の種まきとはそういうもので、土地を選んで撒くことができない。だから、豊かに大胆に撒く必要がある。ただ、どのような地に落ちたかによって、その後の状態が変わってくる。悪魔が来て、心からみことばを持ち去られてしまった人たちや、試練のときに身を引いてしまう人たちがいるが、その人たちは、そのうちに教会からいなくなる。

教会に留まる人たちは二種類の人たちだ。まず、この世の心づかいや、富や、快楽によってふさがれて、実が熟するまでにならない人たちだ。この人たちは、いつまでたっても成熟しないで、同じ問題の周りをぐるぐる回る。また、リーダーの関心を自分たちに向けようとする。もう一種類の人たちは、正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせる人たちだ。この人たちが、その地域の未来を担っている。リーダーは、実を結ばない人たちを見放してはならないが、良い地へのかかわりの優先順位を高めなければならない。

多くの場合、伝道の最初の段階で、良い地が誰なのかを見分けることができる。なぜなら、祈った平安がその人に注がれているかどうかを見極めることができるからだ。ルカの福音書第 10 章の七十弟子派遣エピソードでは、家長が受け入れないことがわかったら、足のちりさえもぬぐって立ち去るようにと命じられている。足のちりをぬぐうほどなのだから、当然食事の接待を受けなかったはずだ。最初に平安を受け取るかどうかで、後でどの程度その人にかかわるかという目安をつけることができる。

神から与えられる愛に動機付けられて、未信者のために大胆に平安を祈り、相手が平安の子がどうかを見分け、その後のかかわりの程度を決めることが、宣教の最初のステップになる。

3）学校型キリスト教からの脱却

イエスの弟子集団の中で、パンを割くということには、特別な意味があったと思われる。日毎の糧を今日も与えてくださった神に感謝をささげ、自分たちの生活がまったく神に依存するものであることを告白し、金銭ではなく神に仕える決意を新たにした。また、安息日の伝統を引き継いだ彼らには、過越の子羊の犠牲を想起するものでもあった。神の救いの物語を、パンを割くことで辿ったのだ。最後の晩餐以降、キリストの十字架の犠牲を思うという意味が加わり、主が来られるときまで主の死を告げ知らせるという宣教の方向付けがなされた。さらに、一つのパンから食するがゆえに、一つのからだだという一体感を確認するという意味もあったし、貧しい人を食事に招くことで生活を援助するという機能も含まれていた。このように食卓で、感謝や礼拝が捧げられ、救いの歴史が確認され、宣教の決意がなされ、家族としての交わりがなされ、社会的責任が果たされたのだ。

西洋の宣教師が紹介して日本に根付いた「学校型キリスト教」は、イエスの弟子集団が持っていた豊かな食卓の交わりの機能を、教室や講義棟での学びに分解したものだ。統制された教室の中で、一人の教師が一方的に話す講義や講演会では、一人ひとりの信仰の戦いや葛藤や勝利や悔い改めが分かち合われることは少ない。一人が話し続けるということは、見方を変えると、他の人の話す時間を制限していることだし、双方向的なコミュニケーションをないがしろにしていることだ。かくして、フィードバックを受けつけない教師の教えは、人々の生活実感から切り離されてしまう。また、神に従って隣人を愛するようにと互いに励ましあう交わりの機能は、ほとんど失われてしまう。いくら聖書を正しく解き明かしても、「一対他」のモノローグの設定では、聴衆のライフスタイルに変革をもたらすのは難しい。

学校型キリスト教を、水族館にたとえることができる[5]。水族館では、サメが、アジやイワシと並んで泳いでいる。自然界では餌となるはずの魚を、水槽の中のサメが捕って食べないのはなぜか。狩りをしなくても、時間になると死んだ

[5] Alan Hirsch, *The Forgotten Ways : Reactivating the Missional Church* (Grand Rapids MI : Brazos Press, 2009), 229 参照

魚が上から落ちて来くるので、わざわざ逃げる魚を追いかけなくても、上を向いて口を開けれていれば命を保つことができるからだ。それに、いつも意図的に満腹状態にされている。水族館のサメは、飼育員に依存し、神が与えられた狩猟本能を発揮することなく死んでいく。生きた食物を自立的に捕るという創造のデザインとは別の仕組みで延命させられているのだ。

サメが飼育員に依存するように、人々は良い説教者に依存しがちだ。ある有名な聖書学者の教会は、世界中から集まるファンでいつも満員御礼だったが、彼の没後教会は閉鎖された。良い牧会者にも人々は依存しやすい。いつも話を聞いて励ましてくれる牧会者が、自分をどう扱ってくれるかということが生活の一番の関心事となる危険がある。良い伝道者にも人々は依存してしまう。自分で伝道しないで、プロの伝道者のところに人々を連れてくる。神様の導きを正しく受け取る指導者にも人々は頼ってしまうことがある。自分で直接神様に聞かないで、指導者に導きを仰ぐ。リーダーの教えや世話が、人々が自立的に、また直接的に神に向かうことを妨げてしまうことがあるのだ。

水族館のもう一つの問題点は、子孫を生み出すこともテクノロジーに頼ってしまうことだ。ある魚の養殖には、高度な技術が要求されるが、自然界では人の手によらずに繁殖する。自分であくせくしなくても、誰かが餌をくれて、誰かが子孫を生み出すことまで助けてくれる人工的な環境では、「生めよ、増えよ。」と命じられた神の命令を実行することはできない。水族館に行くと、たくさんの魚がいるようだが、水族館がある地域の海にどれほど魚がいるだろう。水族館の外には、天敵を含めた様々な危険があるが、安全な水槽の中にいては、海を子孫で満たすことはできない。

イエスの弟子たちが、霊的な生命を保ち続けただけではなく、霊的な子孫を生み出し続けることができたのは、彼らが安全な場所に留まらないで、派遣され続けたからだ。そういう意味で、ルカの福音書第10章の七十弟子の派遣記事は重要だ。それは、イエスが召天された後も、先輩の弟子が後輩の弟子を派遣するというDNAを刻み込むイベントだったからだ。

宣教地に出かけていくと、狼の中にいる羊のような状態になることがある。また、持ち物や方策に頼って何かができるほど、異文化宣教は生易しくはない。先輩の弟子にすれば、後輩をそのような危険な所に送り出すことに躊躇を感じ

ることもあっただろう。一方、後輩の弟子にすれば、先輩たちと離れたくないと思うこともあっただろう。しかし、彼らは、羊飼いのいない羊のように、弱り果てて倒れている人々を見て、「かわいそうに思われた」（マタイ 9：36）イエスの心を受け取って、自分がまず出て行き、さらに後輩たちを派遣したのだ。そのことが、結果的に共依存のリスクの克服に繋がったのだと思われる。

学校型キリスト教から脱却するために、四つの提案をする。1）イエスのあわれみを受け取りなおす。たとえば、駅の改札口に立ち、行き交う人々のことを、神がどう思っておられるかを黙想するとよい。コミットしたクリスチャンが人口の0.2パーセントしかいないと想定すると、1000人とすれ違って、やっと一人のコミットしたクリスチャンと会うことができるという計算になる。神が、失われつつある998人のことをどう思っておられるかを考えるのだ。2）専門家のモノローグの時間を少なくし、信徒同士のダイアローグの時間を増やす。3）後輩を連れて宣教旅行をし、後輩に大胆に働きを委ねる。4）テレビを消して食事のときの会話を楽しむ。

4）郵便配達といやし

そもそも、習得が難しいと言われている日本語を勉強して、日本に住もうというほどの宣教師は、大概インテリで、物の見方は二極分化している。[6]彼らは何を見ても、超越的な神を探求する「宗教的領域」か、自然現象を分析する「科学的領域」かの、いずれかに属する事象だと決めつけて物事を理解しようとしがちだ。一般的に、宗教的領域は見えないし経験できない他界の領域だと考える一方、科学的領域は見えるし経験することもできる現世の領域だと考える。神は遠くにおられる権威ある方なので、下々の者は理解することも接近することもできない。そのため、専門家に解説してもらったり、仲介してもらわなければならないと考えるのだ。

だが、見えない他界の上層と、見える現世の下層の間には、見えない現世の中間層があり、それは、聖書の中に豊かに描かれている。たとえば、まじない、お守り、天使の出現、悪霊祓い、他の神々との対決、癒し、預言、口寄せ、奇

[6] Paul G. Hiebert, "The flaw of the excluded middle." (*Missiology*. 10：1：35-47.), 44 参照

跡等だ。ヘブル的世界観と比べると、インテリ西洋人宣教師の世界観には、この中間層への意識が極めて乏しい。だから、病気になると医者に行くし、聖書「研究」を大切にする。見えない他界におられる神を知るためには、知識が必要だと考えるからだ。

では、日本人はどうか。日本人は占い好きだ。テレビ番組の朝の各局の占いを全部見てから一日を始める主婦たちがいる。夏になると怪談話で盛り上がる。霊媒師やチャネラーは、今や子どもが観るアニメの世界の主役となっている。「虫の知らせ」を察知する日本人の課題は、インテリ西洋人宣教師には理解しにくい。西洋人は、日本人が結ぶ諸霊との関係を偶像礼拝だと切り捨てて、唯一神を説明しようとする。また、彼らは、「見える現世の科学の世界では理解できないことがある。それが神だ。」と逆説的に説明しようとする。だが、日本人の言い分は「神と言ってもいろいろあるからな。」である。

宣教師の世界観に中間層が除かれているように、日本人の世界観には、宣教師が宗教と分類している上層が欠落している。[7]「世界の外におられる神」という概念を理解する日本人は少ない。神話によると、神もまた世界から生まれたものなのだ。そのため、神、罪、救いの三段論法は、最初のホップでつまずくことになる。日本人に対しては、諸霊との交信を性急に否定せずに、霊であられるイエスと交信できる幸いを証しする方がよい。前述のように、祈りは文化に内蔵されているのだから、共に祈ればよいのだ。

説明を最小限にして、イエスとの人格的な関係を経験するように助けると、正しい交流のチャンネルが強化される。すると、他のチャンネルは必要なくなってくる。そうなった後に、イエスが世界の外におられる創造主だと説明すればよいのだ。宣教師は、神と日本人との間に入って、合理的に説得しようとしなくてよい。日本人と一緒に祈り、祈り方を教え、祈りの結果を共に確認し、一緒に感謝をささげることだ。祈りを通して神を経験して関係が深まると、後は神ご自身が教えられる。

祈りを通して、しばしば不思議な働きが起こる。それらには二つのカテゴリ

[7] Mitsuo Fukuda, *Developing A Contextualized Church As A Bridge To Christianity In Japan.* (Gloucester, UK： Wide Margin, 2012), 56-66 参照

ーがある。第1に、知らないはずのことが言い当てられることだ。サマリヤの女に対して、イエスが「あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。」（ヨハネ 4：18）と語られ、そのことを通してスカルの町が救われていったが、それと同様のことが、今も日本で起こりつつある。神は日本人を何とかして救い出そうとしておられるので、その人にしかわからないようなことを働き人に知らせ、それが明らかにされることを通して、神がその方を愛して人生にかかわり続けておられることを知らせられるのだ。働き手は、郵便配達人のようだ。忠実に配達の職務を果たすときに、手紙の書き手の思いが、受け取り手の心に伝えられる。

第2のカテゴリーは病のいやしだ。未信者に会って、「祈ってほしいことがありますか。」と聞くと、「健康」と答える人が多い。家族や自分が健康であることは、多くの日本人にとって幸せのバロメータとなっている。神は、この日本人のニーズに答えてくださる方である。

5）権威をもって宣言する

「死んだらどうなるか知っていますか？」と未信者に聞くと、たいてい三種類の答えのうちのいずれかが返ってくる。一つは、分からない。もう一つは、無になる。最後に、輪廻転生する。そこで、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル 9：27）と言い、ヨハネの黙示録20章から、人生の清算と裁きと判決後の二種類の処遇について話す。

そして、「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれ」（黙示録 20：15）ることを説明し、「あなたの名前は、いのちの書に記されていると思いますか。」と聞く。そうすると、直前の罪の説明に納得した人は「しるされていないと思う。」と答えるし、そうじゃない人は、「わからない。」と答える。筆者はそのときに、「あなたの名前はしるされていません。」と申し上げる。そして、「確実にいのちの書に名前が記される道があるのですが、知りたいですか。」と聞くと、ほぼ全員が知りたいと答える。それから、イエスの十字架と復活について話すという具合だ。

死後の世界について、様々なことを言う未信者がいても、確信をもって話すことができる人はいない。だが、私たちが聖書から話すときに、創造主の権威

をいただいて宣言することができる。人々は、宣教者の内にある確信に反応するのである。だから、「これは宗教じゃないのです。」などと言い訳したり、「あの教派とはここが違うのです。」などと説明したりする必要はない。イエスは、「聞く耳のある人は聞きなさい。」（ルカ 14：35）と叫ばれた。福音をはっきり告知した上で、そのときに聞く耳のない人には、それ以上説明する必要はない。聞く気持ちになったときに、話す機会があれば話すというスタンスでよい。この世では皆悩みがあるので、苦難にぶつかると、後日聞く耳を持つかもしれない（ヨハネ 16：33 参照）。

あるとき、遠い親戚の年配の婦人が、山奥の病院に入院先を変えたという知らせを受けた。見舞いに行き、病室に入ると、6 人の年配者が無言でベッドに横たわっていた。誰がその人かを見分けることができずに戸惑っていると、一番奥のベッドにいた婦人が声をかけてくれた。近づいてその方を見ると、もともと小さな方だったが、極度に痩せておられた。また、頭を剃っておられた。あまりにも小さくなられたご様子を拝見して涙がこぼれた。

彼女は、小さな声で私の名を呼んで話しだした。「みつお君、あなたを待っていたんよ。あなたが何年も前に聖書をくれたときに、信じとけばよかった。でも、今では、こんな姿になってしもうた。」私は、「おばあちゃん、まだ遅くないよ。」と言って福音を語った。彼女は長年仏教系の新宗教に心酔しておられたのだが、その日、イエスを心にお迎えし、病床洗礼を受け、とても喜んでおられた。そして、二日後の朝、やすらかに息を引き取られた。私たちの周りには、入院はしていなくても、私たちの名を呼んで、「あなたを待っていたんよ。」という人が置かれているのだと思う。もし、私たちが躊躇するなら、神が会わせてくださった方に生命の道を紹介する機会が永遠に失われてしまう。

イエスは、日本をご覧になって、「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある。』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。」（ヨハネ 4：35）とおっしゃっているのだと思う。今刈り取らなければ、せっかくの収穫が無駄になる。ルカの福音書第 10 章の文脈は、種まきでも、耕しでもなく、刈り取りだ。回りくどく説明する必要はない。まっすぐに真理を語ることで、信じられないほど多くの日本人を救いに導くことができる。今は収穫の

時なのだ。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」（Ⅱテモテ 4：2）

おわりに

日本の地方教会でなされている説教は、七十弟子の派遣記事で示唆されている「四世代以上続く弟子育成の連鎖反応」という目的達成のためには、ふさわしい営みだとは言えない。真理を指し示すことと、その真理を聴衆が生きるということはイコールではない。ましてや、真理を体現した人が、生き方を通して他の人に真理を伝えるというのはライフスタイルの課題であって、会堂で教えるだけでは成し遂げられない。また、宣教地に派遣された弟子たちが、今度は派遣する側に立って、他の弟子育成者を派遣するというムーブメントは、実地訓練なしには起こらない。

本稿では、双方的なディスカッションの導入、リーダーが模範を見せる工夫、思い切った弟子たちの派遣、最小限の説明と祈り、権威を伴う宣言などの、説教以外のコミュニケーションの具体的な適用について提案した。しかし、より大きなテーマは、今日本に訪れている収穫の時に、魂をどう刈り取るかという課題である。刈り入れを待っている畑に、種や鋤を持って出かけても役に立たない。収穫を刈り取る働き人が、そこに派遣されていく弟子たちによって、地元で起こされていくというビジョンを、目を上げて見させていただき、「収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈」（ルカ 10：2）る必要がある。

（宣教戦略シンクタンク「RAC ネットワーク」代表）